俺と私の日常

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と私の日常

【Ｎコード】
Ｎ５３２８Ｙ

【作者名】
学校嫌い

【あらすじ】
ブラコンの姉を持つ俺と、シスコンの兄を持つ私の日常の話し。
※「俺と私」の改訂版です。主人公の性格や話しなど、色々変わっている部分は多いですが、よろしくお願いします。

パン買い競争

「今日こそは勝つぞ！」

「はあ・・・毎度毎度飽きないな？」

今、俺の前に立っている茶髪の女子生徒は、高校が始まって、１週間程経った時に転校してきた。まあ、多分よくあるやつで、親の事情とかそんな所だろうな・・・。

何故、こんなに投げやりかと言うと、俺はその日盛大に遅刻をかましして学校に着いたのは既に５限が始まった時だった。まあ、まだ１年だから、授業も楽だし、途中から入っても迷惑にはならんだろうと思いながら、のろのろと靴を履き替えて教室に向かった。

近くまで行くと、数学教師の声が聞こえて、始まる時間が遅かったのか、まだ出欠を取っている所で、丁度俺の名前は呼ばれた時だった。

ガラッっとスライド式のドアを開けながら

「はいよ～」

と返事をする。

「あら、今来たのかしら？」

「みりゃ分かるだろ？」

「遅刻してきたと言うのに、貴方は相変わらずね」

まだたったの1週間だと言うのに、俺はすっかり遅刻の常習犯と見なされているみたいだ。まあ、事実として、そのたったの1週間で10回以上遅刻しているからな・・・授業を含めて。

そんだけあれば、そりゃ常習犯と見なされるか。

うんうん。

「まあ、いいわ。はやく席に着きなさない？」

「うい～っす」

「また遅刻か？」

「うっせ。お前も中学んときは似たようなもんだったろうが？」

「まあな～」

中学時代の奴と一言交わして自分の席に向かい、筆箱だけ出して机に突っ伏した。別に来なくても良かったんだよな～・・・確かに出席扱いにはなるが、授業なんか聞かなくても問題は解けるし・・・。

寝るか・・・。

おやすみ～、と心の中で言って、さあ、夢の世界へ～と思っていると

プス

「いってえ！」

首筋に何か刺された。

あまりの痛さに叫び声を上げた俺にクラス中が注目し、さっきの旧友に関しては笑いを必死に堪えているのが見ただけで分かった。

後ろを見ると、そこには見慣れない女子生徒がいて、手にはおそらく俺を刺したであろうシャーペンを握っている。

「なにしやがる！てめえ！」

「席に着くなり寝ようとした君が悪いのだろう？授業は起きて受けるべきだ」

「なら、普通に声を掛けるなりしろっての」

「名前も知らないのに、いきなりそんなことが出来る訳ないだろう？」

「名前も知らない奴の首にいきなりシャーペンを刺すのはどうなんだよ？」

その問いに見慣れない女子生徒はしばし考え込み、

「まあ、いいじゃないか。あはは！」

と軽快に笑った。

良くねっての。

「ほら、そこの二人、今は授業中ですよ？」

「ん？ああ、そういやそうだったな」

思い出して、俺は席に座り直した。

まあ、俺とこの女子生徒の出会いはこんな感じだったな。

それから約1ヶ月が経ち、何故勝つとか言う問題になったかと言うと、俺とこいつのどっちが購買の人気のパンを早く買ってこれるかと言う勝負をすることになっているからだ。まあ、それをするように仕向けたのもあの旧友なんだが・・・。

たく、自分が楽しむ為にはなんでもする奴だからな・・・。

「それで？今日は何を買ってくればいいんだ？」

「昨日と同じ！カツサンドか焼きそばパン！」

「はいはい」

「はいは一回！」

「はいはいはい」

面倒だから余分に一個増やした。

「それじゃ、いいな？」

「「おう（ああ！）」」

俺と女は揃って返事をする。

「そんじゃ！よーい、ドン！」

振り上げた腕を一気に振り下ろされたのを合図に女は教室のドアから、俺は窓から飛び降りて購買に向かって走り始めた。

あいつはいつも教室からドアから出て行くからな・・・飛び降りた方が明らかに速いのは、少し考えれば分かるだろうに。

まあ、１年の教室は３階にあるから、着地時の衝撃はちと痛いが、これくらいは姉貴の攻撃に比べたらなんともない。

一回マジでやばかったからな・・・。

と考えている内に着地し、すぐに購買の方へと向かう。

「カツサンドと焼きそばパン」

「はいよ。５００円ね」

ワンコイン渡して人混みを抜けると、目の前にはいま着いたのか肩で息をしている女がいた。

「遅かったな？」

「また負けた！」

打ちひしがれる女は放っておいて、俺はパンを食べながら教室へと戻った。

と、これが俺と女の日常だな。

今度はどっちが勝つのやら。

パン買い競争（後書き）

？「始まったね？」

？「そうだな。言っておくが、俺の妹に手を出したら、お前の弟といえど容赦はしないからな？」

？「そんなのこっちの台詞だもん！あたしの可愛い弟に手を出したらあんたの妹でも許さないからね！」

「お前も結構大変なんだな？」

「そっちもね？」

夜の一コマ

突然だが、俺には双子の姉がいる。まあ、特段言う必要もなかったことだとは思うが、後で説明するのは面倒だから、始めに簡単に説明する。

ブラコン。

以上。

「りお～。ごはんできたよ～」

「ああ」

リビングでテレビを見ていると、台所に立っている姉貴に呼ばれて、台所に向かい、皿やら箸やら食器類と適当にウーロン茶を冷蔵庫から取り出し、テレビの前にテーブルに運んでいく。

6人くらいが座れるテーブルにあるが、家には俺と姉貴しかいないから、使っても無駄に広いだけだ。

テーブルに並んで（なぜ？）座り、

「「いただきます」」

食事を始める。

さっき、姉貴が俺の名前を呼んだからもう分かっていると思うが、

俺の名前は『佐久間裏央（さくまりお）』だ。

姉貴は『佐久間巫女（さくまみこ）』。

俺の黒髪とは全くの正反対と言っても良い程、姉貴の髪は真っ白だ。小さな頃から、この色だったから地毛なんだろうが、両親はどっちも黒髪だったのに、何故だろうか・・・。

普段は降ろしていて、腰辺りまであるが、料理をする時はポニーテールにしていて、後は偶に気分で変えたりしている。

目の色は蒼。

俺は黒。

身長は俺が１７２?で姉貴が１５４?。男女の双子の場合、身長に差が出るのは多分、当然だとは思うが、同姓だと殆ど似るのにな・・・人体の不思議ここに在りって感じだ。

まあ、その我が姉貴は隣でテレビドラマを見ながら、一々感情移入して笑ったり、涙ぐんだり、泣いたりと忙しく飯を食べていて見ていて全く飽きない。

「姉貴、とりあえず飯を食え」

「む?また姉貴っていう・・・昔みたいに巫女姉ちゃんってよんで?」

「この年でそれはとんでもない羞恥プレイだな。故に却下だ」

「む～。中学生になったころから裏央が甘えてくれない」

ふむ、俺の記憶が正しければ甘えてきたのはいつも姉貴だったと思うが・・・。

小学校の時もずっと俺にくっついていたし、中学の頃は告白されても俺の方が好きだと言って断っていたらしい。

そして、現在。高校が始まって一ヶ月程経過した訳だが、珍しく高校ではあまり接触してこない。まあ、いつも視線は感じるから、どこかから見てはいるんだろうが、どれだけ探しても見つけられないんだよな・・・。

後は、そうだな・・・中学に入ったばかりの頃だったか、一度だけ姉貴が何か用事があって、一緒に帰れない日があり、俺は一人家までの道を歩いていたら、いきなり後ろから殴られた。

まあ、小学生の頃から姉貴は人気があり、変な奴も偶に出たりしたから、守る為に鍛えていたお陰で大したダメージはなかったが。頭を押さえながら振り向くとそこには５人ほどの男子生徒がいた。

流れで分かると思うが、まあ、そいつらも姉貴を狙っている奴らであって、それなら一人ずつ来いとか、いきなり殴るとかどうなんだ、とか思ったりはしたが、言っても無駄だろうと思いとりあえずいつ掛かってこられてもいいようにした。

で、俺を殴った奴が掛かってきたのを合図に、他の４人も掛かってきたからバトルスタートって感じで喧嘩開始。

内容は面倒だから勝手に想像してくれて構わないが、結果だけ言え

ば一対一まで持ち込む所までは行った。

そこまでは良かったんだがな・・・。

その後姉貴が喧嘩していた俺を見つけて俺の名を大声で呼んだことで、そいつと他の奴らは去ったんだが、姉貴が心配したのか、加減もせずに突っ込んできたんだよなぁ・・・しかも綺麗に鳩尾に入り、喧嘩のダメージもあったお陰で俺はそのまま気を失った。

気が付いたら家にいたから、姉貴が運んだのかと思ったがどうも俺は自分で歩いて家まで帰り、玄関に付いた途端倒れたみたいだ。

俺ホントに人間？とか思ったぞ。

食器の片付けや洗濯は俺がすることになっており、今は食器を洗っている最中。姉貴は先に風呂に入っていて、場所が近いこともあり歌声が聞こえてくる。

暫くの間、家にはカチャカチャという音と姉貴の歌声が響いていた。

風呂から上がってきた姉貴はまっすぐ走ってきて、俺に飛びついてきた。

シャンプーの匂いが鼻孔をくすぐる。

「りお。明日もお昼は購買で買うの？」

「ああ」

「お弁当作ろうか？別に大丈夫なんだよ？」

俯せになって頭を膝の上にのせて手と足を伸ばしながら、見上げてそう言った、姉貴の頭を撫でる。

「いや、朝くらいはゆっくりしてくれ。いつも夜は頼ってるしな」

「ふふ、ありがとう。でも、本当に大丈夫なんだよ？」

「なら、お前が朝ちゃんと起きられる様になったら頼むよ。それでいいか？」

「ホント！？」

「ああ」

「分かった。今日から早寝早起きする。もう寝るね！お休みりお！」

「ああ、お休み、巫女姉ちゃん」

「ぁ・・・うん！」

久し振りに昔の呼び方で呼ぶと、満面の笑顔で返事をして二階に上がっていった。

「・・・・さて、俺も風呂はいって寝るか」

姉貴はやるといったらやるからな。

出来る限りフォローしてやらんと。

テレビを消してソファから立ち上がり、着替えを持って風呂に向かい、３０分ほど入浴してから、上がって寝間着に着替えてから、部屋に向かった。

ベッドの場所は、電気を点けなくても分かる。

布団を捲って潜り込むと中には姉貴がいて穏やかな寝息を立てていた。

「やっぱりお前の方が甘えてるよ」

頭を撫でると

「りお～」

と名前を呼ばれた。

「大好きだよ～」

「・・・俺もだよ。お休み」

布団をちゃんと掛けて、俺は目を閉じた。

隣に姉貴の体温を感じながら。

双子同士

朝の通学路を姉貴と並んで歩いていると後から何かが飛んできて、頭に直撃した。

「いった～・・・」

姉貴の方に。

「大丈夫か？」

「う～・・・痛いよ～、りお～」

泣きながら俺に抱きついてくる姉貴の、何かが当たったであろう部分を撫でる。

「よしよ～し。痛くないぞ～」

「うぅ～・・・もっと撫でて？」

甘えるような声で言ってくる姉貴の頭を要望通り撫でていると、近くに誰かが来た。

みてみると、そいつは女だった。隣には俺と同じ位の身長の男がいて、なぜか俺を睨んでいる。あ、よく見ると、周りの男子は殆ど俺を睨んでたるな・・・だがな？彼女がいる奴まで睨んでくるのはどうかと思うぞ？

まあ、喧嘩になろうがどうなろうが、知らんが。

「なんだ？朝から会うのは珍しいな？」

「りお、誰？」

「ん？ああ、一ヶ月くらい前に転校して来た奴。名前は知らん。隣の奴もな」

「隣？・・・あ、転校生の人」

姉貴は隣の男をみるとそう言った。

「・・・まあ、とりあえず、ここで話すのは何だし学校行こうぜ？」

「分かった」

答えたのは姉貴ではなく女だった。

「ああ、投げたのがお前だってことはもう分かったから」

「え！どうして？」

「近づいてきたタイミングから考えたらな・・・。まあいい、行くぞ？」

先に歩き出した俺に後の二人も付いてきた。

姉貴は未だ俺にくっついているが・・・いいか。

「で、姉貴よ。こいつは誰なんだ？」

「えっとね・・・この子と一緒で、一ヶ月くらい前に転校してきた人。名前は・・・遠藤・・・なんだっけ？」

「拓也だ。それで、私の双子の兄」

この二人は異性なのに似てるな・・・髪の色から目の色まで一緒だし。唯一違うのは身長だけだ。

「ついでに私も自己紹介しておく。遠藤真奈だ」

「へぇ～・・・まあ、どうでもいいが。じゃあな？行くぞ、姉貴？」

「うん」

「待て」

「ん？」

男の声が聞こえて、振り返ると遠藤・兄が俺を睨んでいた。

「もし、俺の妹になにかしたら、殺すからな？」

「する訳無えだろ。ば～か」

いきなり何を言っているんだかな、この茶髪吊り目・・・茶髪り目？うん、それでいいな。

「そっちこそ、りおに手出したら許さないからね！」

「ふん！内の妹に限ってそんな奴を好きになるわけだないだろう？なあ、真奈・・・真奈？」

「・・・え？あ、なに？」

何かボ～っとしていて茶髪り目の言葉に遅れて反応する遠藤・妹。心なしか顔が少し赤い気がするが、熱でもあるのか？

「お前、まさか・・・てめえ！妹になにした！」

「なんだよいきなり？俺がそいつになにかするように見えるのか？お前は？はっ、眼科でも行ったらどうだ？」

「何だと！」

「やんのか！」

いきなり突っかかってきて、俺が返すと、なぜか切れられた。俺も勢いのまま切れて、さあ、始めようかという時に、

キーンコーンカーンコーン・・・。

と予鈴が響いた。

「うお、やべ！行くぞ、姉貴！」

「うん！」

「あ、待ちやがれ！てめえ！」

「うっせ！この茶髪り目！待てと言われて誰が待つか！茶髪り目！」

「な！繋げんな！しかも、二回も言ってんじゃねえよ！」

後で騒いでいる茶髪り目は放っておいて、俺たちは校舎に駆け込んだ。

「ふう・・・なんとか間に合った。じゃあ、姉貴、またな？」

「うん。寝ないように頑張ってね？」

「善処するさ」

「はは。それじゃ」

「おう」

ぱたぱたと駆けていく姉貴を見送ってから俺も教室に入り、席について寝た。

「おい！」

あ、ついでに紹介しておく。

自称旧友の・・・・・・・・・・・なんだっけ？

「健太だよ！あと自称ってなんだよ！」

「黙れ」

「ひでえっ！」

弁当

授業は、最近にしては珍しく何も起こることなく進んだ。寝ていても後から刺されなかったのだ。どころか、当たられた時以外何も喋っていなかった。休み時間も普段は友達とかと話していたんだが、上の空だった。

昼休みになり、席を立つと、教室の扉が開いて姉貴が入ってきた。

「りお！」

そのまま駆け寄ってきて、抱きついてくる。
ちなみに席は窓際後ろから二番目で後ろに遠藤がいる。
昼休みになったらどっか行った。

「お弁当食べよ！」

「ああ。やっとできたもんな？」

「うん！」

満面の笑みを浮かべる姉貴の頭を撫でていると、

「てめえ！佐久間！」

「「ん（なに）？」」

名字で呼ばれたから同時に返事をした。

「あ、弟の方っす」
「なんだ？」
「こっちこい」
「なんだよ？姉貴ちょっと待っててくれるか？」
姉貴に断って、俺は斉藤について行った。
「お前、姉弟だからっていい気になるなよ！」
「うっせ」
「ボハッ！」
殴ったら変な声出して飛んだ。
「待たせたな？て、どした？」
戻ると姉貴が三人ほどの女子に囲まれていた。
「あ、ううん。なんでもない」
とその内の一人が言って、他の二人も苦笑いしながら去っていった。
「どうしたんだ？」
「う～ん・・・人気者の弟を持つと大変だな～って。ま、それでけ

りおが格好良いってことだね！お姉ちゃんは鼻が高いよ！」

そう言ってない胸を張る姉貴。

可愛くて思わず撫でた。

「ほら、飯食おうぜ？」

「あ、うん」

俺の机を挟むように座って、真ん中に姉貴が弁当箱を二つおいた。

青い包みが俺で赤い包みが姉貴。色が違うだけで模様は同じ花柄。

俺の方に姉貴の弁当箱、姉貴の方に俺の弁当箱があるから、他の奴が見たら逆だと思うだろうな・・・。これも姉貴の希望だ。

「今日は授業中起きてた？」

「いや、入ってすぐに寝た」

包みを開けながら姉貴が聞いてきたから、俺はそう答えた。

「もう～・・・ちゃんと起きてないと。中間テストでひどいことになるよ？」

「大丈夫だって。一夜漬けで覚えるから」

「りおはそれが出来るからいいんだよ。あたしなんて毎回大変で～」

とか言っているが、姉貴は学園でトップの成績を誇る生徒だからな。

その辺の心配は無いだろう。

「それじゃ、いただきま～す」

「いただきますっと」

「はい、あ～ん」

箸で卵焼きを一つ摘んで俺の口元に持ってくる。

素直に口に入れると箸が抜かれる。

租借すると甘みが広がった。

「うん、美味い」

「ホント？良かった～」

本当に嬉しそうに笑う姉貴。

俺は唐揚げを摘んで姉貴の方に差し出した。

「ほら」

「ぁ・・・えへへ／／／あ～ん／／／」

嬉しさと恥ずかしさが混じった表情をして、唐揚げを口に入れる姉貴。

ちなみに姉貴の分は俺が、俺の分は姉貴が作っている。

「ん～～！美味しいよぉ～」

「大げさだっての」

「そんなことないよ。りおってあたしより料理上手いし」

そうか？姉貴の方が全然上手いと思うが・・・。

まあ、喜んでくれるならいいか。

「んふふ～。幸せだよ～」

笑っている姉貴の頭を俺はまた撫でた。

「えへへ～／／／」

境界線

飯を食った後、放課後一緒に帰る約束をして、姉貴は教室に帰った。
その後、斉藤が近寄ってきて、

「お前ら本当に姉弟なのか？」

と聞いてきた。

いきなりどうしたんだ、と聞き返すと、俺たちの様子を見ていると姉弟ではなくカップルに見えるらしい。

「それに、お前達はお互いを好きすぎないか？」

今日のこいつはどうしたんだろうか？

いつもならこんな真面目な雰囲気は出さないんだがな・・・。

それはおいといて、『お互いを好きすぎている』？

「姉弟なんだから、好きなのは当たり前だ。少なくとも俺と姉貴はずっとそうだ。
お前は知ってるだろ？」

「まあな・・・ただ、心配事はあるんだよ、知ってるから余計に」

姉貴が出て行ったドアを見ながら、斉藤は至極真面目な顔で言った。

「・・・言ってみろよ」

「・・・・・・」

少しの沈黙の後、斉藤は言った。

――――お前達が一線を越えてしまうんじゃないか

と。

ま、確かにそれはあり得ることかも知れないな。姉貴が俺に対して抱いている好意が弟としてなのか、それとも

「りお？」

「ん、ああ」

横にいた姉貴の声で俺は現実に引き戻された。

「どうしたの？何か考え事？」

「いや、少しボ～っとしてただけだ」

「そう？」

「ああ。そういや、まだ材料ってあったっけか？」

ふと思い出して、聞いてみると、まだ明日分くらいまでは大丈夫だと言ったので、ならいいかと思い、そのまま姉貴と並んで家へ帰った。

で、晩飯を今日は一緒に作ろうと思って冷蔵庫を開けた訳だが、

「お弁当のこと、忘れてた・・・」

結局買いに行くことに。

ついて行くとぐずる姉貴をなんとか落ち着かせて、近所の結構でかいスーパーに行き、籠をもって奥へ。

材料を籠に入れていき、最後に鶏肉を買おうと肉コーナーへ向かい、取ろうとしたら誰かの手とぶつかってしまった。

「おっと、悪い」

「いや、こちらこ・・・そ」

なんだ最後の間は？

と、よく見てみるとそいつは

「遠藤か」

遠藤だった。

学校帰りにそのまま来たのか、まだ制服のままだ。

にしても遅いな？この時間まで学校にいたのか？

・・・まあ、いいか。

「えっと・・・佐久間？」

「以外の誰かに見えるか？」

「いや、見えないが。買い物か？」

「ああ、晩飯を作ろうと思ったら、弁当の分がないことに気付いてな」

「弁当？ああ、だから購買にいなかったのか？」

「ああ」

そういえば、いつもこいちは昼休みになったら、勝負だー！とか言ってくるが、今日はそれすら無かったな。

「お前、今日はなんかテンション低かったな？なにかあったのか？」

「え？ううん・・・何も無かったけど・・・」

とは言っているが、みるからにテンションが低いな。

とりあえず肉は確保。

「じゃ、俺は帰るから」

「え？あ！取られた！」

「早い者勝ちだ！じゃあな！」

後ろで何か叫んでいる遠藤をおいて、俺はレジに向かい、運良く誰もいなかったから直ぐに会計は終わった。パッパと袋に詰めてさっさと外に出て、家へと歩く。

と後ろから

「佐久間！」

と名前を呼ばれた。

振り向くと袋を持ってこちらに走ってきている遠藤がいた。

「どうした？」

「え？あ、えっと・・・佐久間は自分でご飯を作っているのか？」

わざわざそんなことを聞くために追いかけてきたのか？

まあ、別に言っても言わなくてもどっちでも良いことだが。

「たまにな。普段は姉貴が作ってる」

道路の端に寄って壁に寄り掛かると、遠藤も同じように端に寄った。

「そうなのか・・・最近の男子にしては珍しいんじゃないか？料理をするなんて」

「まあ、俺と姉貴しかいないから、必然的にそうなっただけだよ」

「え？あ、ご両親は出張とか？」

「いや、死んだから」

「え？」

全く予想していなかった言葉が出たからなのか、遠藤はそう小さく声をもらしただけで、暫く何も言わなかった。

車が一台通りすぎて、見えなくなった頃、

「えっと・・・ごめん」

と戸惑いながら謝った。

「いいさ。それより、お前家はこっちなのか？」

「あ、ううん。あっちの方」

なんか少し口調が変わってる気がするが、気の所為か？

遠藤の指さした方角はスーパーの向こうだった。

空を見てみると、もう少しで陽が暮れそうになっている。

「送ろうか？」

「いや、大丈夫だ。それじゃ、また学校で」

「ああ、気を付けてな？」

「そっちもな？」

一瞬だけこちらを振り向いて、遠藤は走って帰っていった。

やっぱり、口調が変わっていた気がするが・・・まあ、いいか。そんなに気にすることでもないし。

「ただい「お帰り！りお！」ごふっ！」

帰って来た途端姉貴が飛んできて、躱そうと思う暇もなく腹に直撃した。

「ごめんね？」

腕にくっついて、姉貴は弱い声で謝る。

「大丈夫だって。それより、飯食おうぜ？冷めるぞ？」

「・・・うん、そうだね」

何とか気を取り直した姉貴は箸を持って、手を合わせて食べ始めた。

いただきます、を忘れてるぞ？

ま、やっぱり気にしてるんだろうけどな・・・。

「・・・・・・」

「？りお？」

ポフと軽い音を立てて、姉貴の頭に手を置くと、姉貴は不思議そうに俺を見た。

「ん・・・ふふ、りお、くすぐったいよ」

何も言わずに撫でると、姉貴はやっと笑った。

「やっぱり、笑ってる方が良いよ。巫女姉ちゃんは」

「ぁ・・・えへへ、ありがと／／／」

「どういたしまして。さ、食べようぜ？」

「うん。いただきます」

「いただきますっと」

怒っている時、拗ねている時、眠そうな時、甘えてくる時・・・その時々で表情が変化するが、やっぱり笑顔が一番じゃないかと、俺は思う。

特に姉貴はな。

何より、

『う、ぐす・・・おとう・・・さん・・っ・・・おかあ、さん・・・』

泣いている顔なんて見たくない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5328y/

俺と私の日常

2011年11月20日00時10分発行